


くらしナビ  ライフスタイル

退職後の第二の人生 田



ガラスの天井 俺たちが壊す

●次世代育成NPO

ばたばたと競うような足音。6歳と3歳の兄弟が、迎えに来た祖父に駆け寄り、抱きついた。

9月下旬のある日、午後6時を少し回ったところ。東京都杉並区の住宅街にある保育所で、古久保俊嗣さん(65)同区には、孫2人を前に目尻が下がりはなしだった。「上の子はサッカーと野球をやっているんです。孫って本当に可愛いもんですよ」

古久保さんは、男女共同参画や次世代育成支援を目指すNPO法人「エガリテ大手前」の代表だ。主婦やサラリーマンから医師、社会福祉士、公認会計士といった専門職まで、さまざまな分野の人がメンバーとして名を連ねる。全国各地で開く祖父の孫育て講座「ソフリエ」。次世代育成支援達成度の自治体別ランキングの作成・公表。活動は多彩だ。



2人の孫を保育所に迎えに来て、仲むつまじく言葉を交わす古久保俊嗣さん(右)＝東京都杉並区で

そんな古久保さんから意外な言葉を聞いた。「私はね、妻と娘に対して『俺が家族皆を食わしてるんだ』っていう英雄気取りをした、嫌な男でしたよ」

かつては商社マンとして、「24時間働けますか」という価値観で生きていた古久保さん。なぜ180度違う「第二の人生」を選んだのだろうか。

古久保さんは1954年、大阪府岸和田市で生まれ、その後引越した同府枚方市などで幼少期を過ごした。進学した高校は地元の府立大手前高(大阪市中央区)。創立130年を超える同校は前身が女学校で、戦後の民主化で旧制中学が高校に再編される過程で、男女共学になった。

「女学校の薫りがそここに残っている学校だった。今でも珍しいと思うけど、出欠確認で生徒の名前を呼ぶ時は、女子が先で男子が後。僕は『女尊男卑』だって冗談を言っていました」と回想する。

●女子活躍せぬ職場

東京都内の大学を経て78年、大手商社会社に就職。当初在籍した人事部門では、86年施行の男女雇用機会均等法への対応準備にも関わった。

「女子活用チームなんてのを作ったりね」。施行後は女性社員も入社したが、男性のアシスタント的な立場で、総合職に採用された人はゼロだったという。そんな職場を「空気がみたくに当たり前だと思っていた。性別で役割分担が固定している状態に、何の疑問も抱いていなかった」と語る。

人事異動で晴れて念願の商社マンになると、「エコノミックアニマルそのもの」の生活を送った。同僚だった女性と結婚して1女に恵まれたが、家事や子育ては妻に任せ

きり。連日、終電後のタクシ一帰りで、盆正月やゴールデンウィークも海外出張。「ひどい夫、父親だった」

米国やニュージーランドで駐在生活も体験したが、50歳を前に転職が訪れた。勤務先が不祥事で3000億円近い損失を出した。「社員同士で責任転嫁し合う姿が悲喜劇だった」。その光景を見ながら「もういいか」と思った。

●「男社会」やめよう

早期退職したのとはほぼ同じころ、関東地方に住む高校時代の同級生たち約20人と久しぶりに再会した。年に1度開かれる大手前高同窓会の幹事役が、古久保さんたちの代に任されたためだ。

互いの近況を聞くと、男性たちは多くが民間企業の現役社員だった。女性たち10人ほどは外資系企業に就職した1人を除いて、全員がずっと専業主婦だった。「医師などの専門職か外資系を選ばない限り、能力と働く意欲があっても門戸が閉ざされていた」彼女たちに、当時大学生だった一人娘の姿が重なった。「もし娘にも、努力しても女性の昇進を阻む『ガラスの天井』があったら……」

「男社会」に疑問を抱かず生きてきたことへの「しょく罪の意識」と、「子どもや孫は違う価値観の社会を生きてほしい」との願いを込め、同級生たちとNPO法人を設立したのは2004年春。「エガリテ」は、フランス語で「平等」を意味する。かつては女子校だった母校にもちなんで名付けた。【夫彰子、写真も】



◆ 余暇さんまいや地方への移住、再就職だけが退職後の「第二の人生」とは限らない。社会の課題にも目を向けるシニアを紹介する。